

ベン・ラーナー

川野太郎 訳

トピーカ・スクール

明庭社

Ben Lerner

The Topeka School

First published by Farrar, Straus and Giroux, 2019

Copyright © Ben Lerner, 2019

Japanese translation rights arranged with
Creative Artists Agency, LLC through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

兄の
マツトに

目次

「ダレンは自分が座っている金属の椅子で……」	8
スプレッド（アダム）	10
「棒と石なら骨を……」	49
スピーチ・シャドーイング（ジョナサン）	52
「ダレンが夢に見たものが……」	89
男たち（ジェーン）	98
「ダレンは隣人の……」	144
サイファー（アダム）	149

「霜で草が固くなり……」 193

ニューヨーク・スクール (ジョナサン) 203

「回転する……」 236

矛盾した効果 (ジェーン) 243

「ダレンはいまもこれからも……」 291

オールド・イングリッシュ (アダム) 293

主題統覚 (アダム) 328

謝辞 353

訳者あとがき 355

解説 白岩英樹 361

トピーカ・スクール

ダレンは自分が座っている金属の椅子で鏡を粉々に割るところを想像した。鏡の奥の闇に人がいるであろうこと、彼らのほうからはこちらが見えるのだということ、テレビで見て知っていた。その視線の圧をはつきりと顔に感じた。スローモーションで雨のように落ちるガラス、あらわになる彼の姿。ダレンはそれを一時停止し、巻き戻し、またガラスが落下するのを見た。

黒い口髭の男がなにか飲むかとしつこく尋ねるので、ダレンはついに、お湯を、と言った。男が飲み物を取りにそこを離れると、もうひとりの、こちらは髭なしの男が、ダレンに調子はどうかと尋ねた。脚を伸ばしてもいいんだぞ。

ダレンは動かなかった。口髭の男が湯気の立つ茶色い紙コップと片手いっぱい赤いストローと小さな包み——ネスカフェ、リップトン、スイートンロー——を持って戻ってきた。好きな毒を選べ、と男は言ったが、ダレンには冗談だとわかった。彼らは毒を盛ったりしない。壁にはポスターが貼ってあった——「自分の権利を知ろう」、それと読み取れない小さな活字。ほかに目を引くものはなく、

そのあいだ髭のない男はずっと喋っていた。部屋の照明は学校のものに似ていた。めずらしく呼ばれたときの、痛いほど眩しい光（「ダレン、もしもし」とグレイナー先生の声。ついて同級生の聞き慣れた笑い声）。

目を落とし、ベニヤ板に刻まれたイニシャルや星や暗号サイファーを見た。その傷跡を指でなぞった——まるでまだ手錠をかけられているかのようになり、両手首をくつつけたまま。男たちのひとりにこっちを見なさいと言われ、ダレンは従った。まず男の目を（青だ）、それから唇を見た。その口が、ダレンにもう一度話すようながした。だからダレンはパーティーでキューボールを投げたときのことをまた話したが、もう片方の男がそれをさえぎった、ただし穏やかに。ダレン、はじめから話してほしいんだ。熱さで口がひりついたが、彼は二度お湯を飲んだ。頭のなかでは鏡の奥に人々が集まっていた。ママ、パパ、ジョナサン先生、マンディ。ダレンが彼らにわかってもらえなかったのは、投げることになつていたのでなければ、投げたりしなかった、ということだった。あの一年生にいつもの蔑称で呼ばれるずっと前から、コーナーポケットからボールを取り、重さを感じ、樹脂の冷たさと滑らかさを感じる前から、人のごった返す暗闇に投げる前から——キューボールは空中に浮き、ゆっくりと回転していた。月のように、それは彼が生まれてからずっとそこにあった。

スプレッド(アダム)

ふたりは彼女の継父のボートに乗り、自分たち以外はだれもない、大きな規格化された住宅地に囲まれた人工湖の真ん中を漂っていた。秋のはじめで、サザンコンフォートをボトルで飲んでいて。アダムはボートの前方にいて、水面に映って変化する青い光を見つめていたが、あれは窓かガラス製のドア越しに見えるテレビだろう。彼女がライターを擦る音が聞こえ、煙が彼のところまで漂ってきて、ほどけた。彼はさっきからずっと喋っていた。

自分のスピーチがもたらした効果を確かめようとして振り返ると、そこに彼女はいなかった。ジーンズとセーターの小さな山の上にパイプとライターがあった。

彼女の名前を呼び、急に周囲の静けさに気づき、手を水につけると冷たかった。無意識に彼女の白いセーターを取り上げると、午後のまだ早い時間にクリントン湖でついた焚き木の煙と、彼女のシャワージェルの人工のラベンダーの匂いがした。今度はもっと大きな声で名前を呼び、あたりを見回した。鳥が数羽、波も立てずに湖面をかすめて飛んでいった、いや、あれはコウモリだ。彼女はいつボ

ートから飛びこむか降りるかしたんだ、どうしてしづきもあげずにやれたんだ、溺れていたらどうする？ いまや彼は叫んでいた。犬が遠くでそれに答えた。彼女を探してぐるぐる回ったせいだめまいがし、座りこんだ。また立ち上がるとボートの縁に視線を這わせた。側面にはりついていて、笑いを堪えているのかもしれない。だがそこにはいなかった。

ボートを操縦して棧橋に戻ろう、彼女はそこにいるはずだ（棧橋は二、三区画ごとにあった）。岸で蛸がまたたくのが見えた気がしたが、そんな季節はとくに過ぎていた。こみ上げてきた怒りを歓迎した。それにパニックを上書きしてほしかった。アンバーが水に飛びこんだのが、自分がまとまりのない言葉で気持ちを告白する前でありますようにと願った。進学してトピーカを出ても一緒にいよと言ったのだが、いまやそうはならないとわかっていた。彼女が陸^{おか}で無事であることを確かめたらすぐに、自分がこの関係をどうでもいいと思っているのを見せつけたくてうずうずした。

外付けのモーターが月の下でかすかに輝くのを見よ。彼の友人たちなら簡単にボートを操れただろう。だれもが——^{フアウンデーション}へ財団のほかの子たちさえ——ほとんどの中西部人に備わる機械いじりの能力を披露し、オイル交換と銃の手入れができたが、彼は操縦桿を操ることもできなかった。スターターロープとおぼしきものを見つけて引っ張ったが、なにも起こらなかった。スロットルレバーのように見えるものの位置を変え、もう一度やってみた。動きなし。泳がなければいけないならどうしようと考えはじめたとき——自分がどのくらい泳げるのかわからなかった——イグニッションに挿さっている鍵が見えた。ひねるとエンジンが動き出した。

できるだけゆっくりと岸に戻った。陸に近づくとエンジンを切ったが、ボートを棧橋と平行につけ

損なつた。グラスファイバーと木がぶつかつて大きくきしみを上げ、近くにいたウシガエルが静かになつた。なにかが壊れたようには見えなかつたが、ちゃんと見えたわけでもなかつた。大急ぎで船内に束ねられていたロープを投げ、棧橋に釘付けされた留め具に巻きつけ、素早く適当に結び目を作つてボートを出た。窓から見られていないことを祈つた。鍵も抜かず、彼女の服もパイプも酒瓶も持たずに、芝生の濡れた勾配を全速力で、彼女の家へと走つた。もしボートが流されて湖に戻つたら、それは彼女のせいだ。

湖に面した大きなガラス製のドアはどれも普段から鍵がかかつておらず、彼はドアをそつと開けてなかに入つた。このときになつてやつと、冷や汗をかいているのに気づいた。ソファに彼女の兄がいるのがかろうじて見えた。枕を頭に載せ、大きなテレビ画面の明かりに照らされて眠っている。ニュース番組が無音で流れていた。部屋のほかの部分は真つ暗だ。起こそうかと思つたがそうはせず、きつと泥だらけだらうと思ひながらティンバーランドのブーツを脱ぎ、こそこそと部屋を横切つた。白い絨毯の敷かれた階段に向かい、そつと登つた。

前にアダムが何度か宿泊したとき、アンバーは両親に、彼が飲みすぎちゃつて、と説明した。彼らはアダムが客間で寝るものと思つているし、家には当然電話して思つてくれるだろう。だがいまだれかと——彼女がいるのかどうかも確かめていないのに——鉢合わせするかもしれないと思つとぞつとした。彼女の母親は睡眠薬を飲んでゐる。処方薬の入つた大きな瓶を見たことがあるし、それを夜ごとワインに混ぜているのを知つてゐた。彼女の継父は最近あつたパーティーでのどんちゃん騒ぎのなかでも眠つてゐた。彼らは絶対に起きない、そう自分に言い聞かせた。なにかをひっくり返し

たりさえなければ大丈夫だ。靴下を履いていてよかった。

二階に着き、寝室に通じる次の階段を上る前に、暗い、広々としたリビングを見渡した。ありふれた狩猟の風景が広がっているのが、奥の壁にかろうじて見えた。猟犬の群れが獲物を森から追い立て、そばの湖には陽が沈もうとしている。赤い光がパネルに点滅していたが、幸いにも住人が警報装置を作動させたことはなかった。炉棚に飾られた家族写真の銀色のフレームの縁に小さな光が集まっていた。セーターを着たティーンエイジャーたちが枯葉の散った芝生に立ってポーズし、彼女の兄はフトボールを持っている。巨大なキッチンでなにかがカチカチと音を立て、静まった。彼は階を上がった。

右手すぐにあるアンバーの部屋はドアが開きっぱなしで、明かりをつけなくても、彼女がベッドで布団をかぶり、規則的な寝息をたてているのが廊下から見えた。肩の力が抜けた。安堵は恐ろしく深く、その安堵が怒りの入る余地をさらに広げた。同時に、ものすごく小便をしたくなっているのにも気づいた。身をひるがえして廊下を進み、バスルームに入ってそっとドアを閉め、明かりをつけずに便器の蓋を上げた。だがまた思い直し、シートをふたたび下げて座った。一台の車が外をゆっくりと通り過ぎ、ブラインド越しのヘッドライトがバスルームを照らした。

そこは彼女の家のバスルームではなかった。電動歯ブラシ、ヘアドライヤー、いくつかの石鹸——どれも彼女の洗面用具ではなかった。とっさに彼女の母親のものだと思った、そうでもありますようにと必死で願った、だが食い違う部分があまりに多すぎた。シャワー室のドアが違う、こんな曇りガラスじゃなかった。トイレの上にある瓶に入ったジェルビーズのレモンの香りにも気づいた。壁にかか

った紫色の小袋には、見慣れないドライフラワーが下がっていた。記憶が一瞬でよみがえり、身震いとともにかの印象は一変した。ピアノ（あのだれも演奏しない）はどこにあった？ 電気シャンデリアも見なかったのでは？ 階段に敷かれた絨毯は——けいばが立ちすぎじゃなかったか？ 暗闇のなかとはいえ、本来は白いものにしては暗く見えすぎじゃなかったか？

間違った家にいるのに気づいて圧倒的な恐怖を感じたが、そんな家々の差異と同時にそれらの同一性も認識したことで、自分が湖を囲むすべての家いちどきに一時にいるという感覚におちいった。まったく同じレイアウトがもたらす崇高さ。それぞれの家で、彼女や彼女に似ただれかがベッドにいて、眠っているか、眠ったふりをしている。彼女の保護者が廊下の奥にいて、大きな身体がいびきをかいている。炉棚の家族写真の表情とポーズは変わるかもしれないが、その表情とポーズの文法はどれも同じだろう。絵画に描かれた場面の要素は異なるだろうが、そんな違いも、見慣れた感覚と単調さを変えるほどではない。巨大なステンレス製の冷蔵庫を開け、あるいは人造大理石のキッチン台を見渡せば、よく似通った、組み合わせがわずかに違うだけのモジュール*式の製品に出くわすだろう。

彼はすべての家にいたが、ばらばらに散った身体*のどれかひとつに縛られていないというまさにそのため、家々の上空を漂うこともできた。子供のころに父の友人クラウスがくれた鉄道模型を眺めているときのようだった。当時の彼にとって列車はどうでもよく、走らせることもめつたになかったが、その風景——ボードを覆って広がる緑のスタティック*・グラス、小さいながらもそびえ立つ松と広葉樹——が大好きだった。信じがたいほど細部に富んだ木々を見たとき、彼は一度にふたつの視点を占めていた。木々の枝の下にいる自分を思い描くと同時に、その枝々を上から注視してもいた。自

分を見下ろしている自分を見上げていた。そして自分を身体から離脱させ、視点と縮尺をリレーのように素早く切り替えることもできた。いまは、この固有のバスルームと同時に存在するすべてのバスルームで恐怖に凍りつき、穏やかな人工湖に浮かぶ小さなボートを無数の窓から見下ろしていた（乾いたアクリル絵の具に重ねられた白い絵の具の風合いが、湖面の揺れとそこに映る月光の印象を添える）。

彼は泳ぐように自分の身体へと戻っていった。どこかでタイマーが押された気がした——意図せずに押し入ったこの家から、あと数分、あるいはほんの数秒以内に逃げなければ、顔面にショットガンを撃ちこまれるか、眠っている少女の寝室の外をうろついているところを駆けつけた警官に見つかると。恐怖のせいで呼吸しづらくなったが、巻き戻しボタンを押せ、来た道を静かに歩いて引き返せ、だれも刺激しないように、と自分に言い聞かせた。まさにその通りにしようとしたが、ささいな差異が、階段を降りていく彼に大声で呼びかけた。あの大きなL字形ソファは見たことがないぞ、ここにあるコーヒーターブルはガラス製だ、彼女の部屋にあったような薄黒い木製じゃないぞ。最後の一段まで来て彼はためらった。正面玄関が目前で手招いていた。自由になれる。だがティンバーランドのブーツが一階の、彼が置いてきた場所にあった。取り戻すには見知らぬ人物が眠っている横を通り抜けなければならない。

* 規格化された部品を組み立てて作る方式のこと。

** 模型で草を再現するための繊維。

ベン・ラーナー
川野太郎 訳

トピーカ・スクール

2025年7月28日 第1刷発行

編集：井上遊介
デザイン：後藤大樹
本文組版・印刷・製本所：モリモト印刷

発行者：家田真也
発行所：明庭社
電話：03-6680-0207
〒162-0808 東京都新宿区天神町4-1-501
www.meiteisha.com

© 2025 in Japan by Meiteisha

Printed in Japan

ISBN 978-4-9914179-0-0

落丁・乱丁本はお取り替えいたします